

夫婦で守った家業の伝統

～夫婦で歩んだ25年間～

天羽漁業協同組合
磯貝 由美子

1. 地域の概要

私たちが住む富津市の天羽地区（以下「天羽地区」という）は、千葉県南部の内湾側に位置し、東京湾の交通の要所である浦賀水道に面している。この浦賀水道は、房総半島と三浦半島に挟まれた幅の狭い海域で、外洋から入り込む暖かい海水と東京湾から流れ出る栄養豊富な海水、東京海底谷から上がってくる冷たく栄養豊富な海水の3つが交わることから、潮の流れが速く、魚の餌となるプランクトンが多く発生するため、多種多様な魚が集まり豊かな漁場となっている。この漁場で獲れる魚は脂がのり、身のしまりが良く、古くから江戸前の魚介類の産地として知られている（図1）。

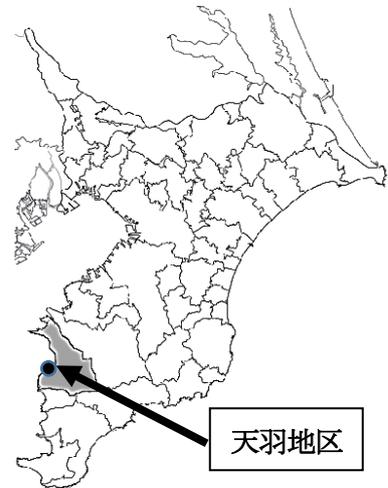


図1 富津市天羽地区の位置

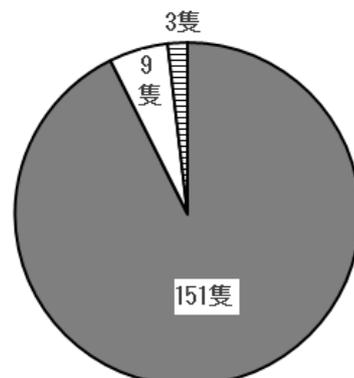
このような恵まれた漁場をもつ天羽地区では、釣りや刺し網、定置網等が営まれ、タチウオ、マコガレイ、マダイ、ヒラメ、マアジ等のさまざまな魚を漁獲しており、その水揚量や金額は、県内でもトップクラスの実績を誇る。

2. 漁業の概要

私たちが所属する天羽漁業協同組合（以下「組合」という）は、昭和42年4月1日に同じ市内の金谷地区、萩生地区、竹岡地区、湊地区にまたがって、誕生した組合である。

組合員数は、正組合員数108人、准組合員数1人の計109人（平成31年3月末現在）で萩生地区にある本所の他に金谷、竹岡、湊の各地区に支所を有している。

漁業の中心は、5トン未満の小型漁船による操業が中心であり、組合全体の163隻のうち、151隻（92%）を小型漁船が占めている（図2）。タチウオやスズキを対象とす



■1～5トン □5～10トン 目10～20トン

図2 平成30年度天羽漁業協同組合における漁船トン数別隻数

る刺し網漁業や釣り漁業の他、アジやサバを対象とした定置網漁業、小型底引き網漁業、さより船引き網漁業、たこつぼ等の多彩な漁業が営まれている（図3）。



図3 竹岡漁港に水揚げされたタチウオの荷捌き風景

※擦れなどが生じないように丁寧に取り扱い、まっすぐな荷姿をしたものは消費地市場でも別格の評価を得ている。

平成30年度の生産量は約1,125トン、金額は約5億6,000万円となっており、その中で私たちが操業している刺し網漁業は平成30年度における組合の総生産量の23%（約260トン）、総金額の44%（約2億5,000万円）を占める重要な漁業種類である（図4）。

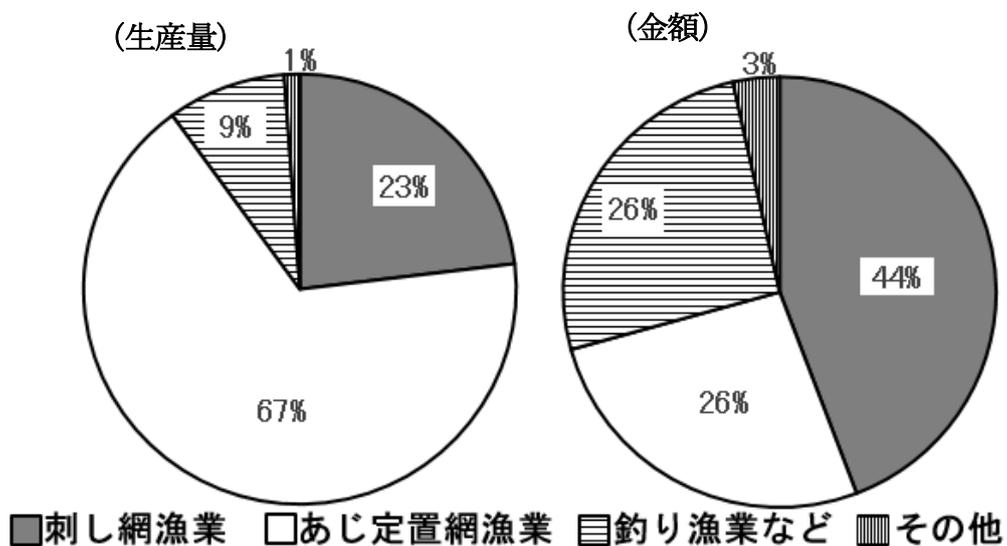


図4 平成30年度 天羽漁業協同組合の総生産量（左）および総生産金額（右）に占める各漁業種類の割合（%）

3. 研究・実践活動の取組課題選定の動機

私は現在、生まれ育った天羽地区の竹岡で刺し網漁業を操業する1人の漁師で、夫と2人で「夫婦船」として、操業を行っている（図5）。

くれた。ちなみに夫は漁師の家の生まれではなかったので、慣れない漁業に従事したことで、人知れず苦労があったのではないかと思われるが、私に語ることはなかった。

(2) 父の家業を継ぐに当たって

会社員として、10年ほど働いた頃、私は刺し網漁船に乗って、父の操業を手伝い始めた。会社に勤めていた間、家業のサヨリ2艘引きには、夫が乗ってくれており、いつかは自分も乗らなければと思いながらも、なかなか決心できなかつたことも事実である。

その後、15年ほど、父と一緒に刺し網漁船に乗り、漁業技術を学び、この頃に父の技を見て覚えたことが後の私を支える土台となっていった。父が体調を崩してからは、父に替わり、夫と共にサヨリ2艘引きにも乗船するようになり、この頃から「夫婦船」として操業するようになっていった。父が以前から、何かの役に立つからと、私に船舶免許の取得を強く勧めていたこともあり、私が小型船舶免許を取得していたことは幸いであった。

しかし、その後も父の体調は思わしくなく、父の船が地元の船団の中でも、とりわけ、水揚高の高い船であったことや夫が地元外の地域から就業したこともあり、周囲から「孝一(父)のところはもう厳しいのではないか？」との声が聞かれることもあった。そういった中、私たち夫婦は家業を続けたら、一生懸命、技術を教えてくれた父も喜んでくれるのではないかと何度も励まし合って乗り切ってきた。

(3) 「女性が漁業に就業するという事」と周囲の協力などについて

① 周囲の反応

現在、世間の風潮として「男女共同参画」「女性の活躍」といった視点の報道や発言を耳にする機会が増えているが、家業を継いだ当時は男社会である漁業の世界で女性が船に乗ることに對する周囲の反応は必ずしも温かいものばかりではなかった。「女性が船に乗って良い訳がない、けがをするだけだ」という周囲の声も少なくなかつた。

そして、実際に1人で海に出ると、緊張と恐怖で体中が震え上がり、逃げ出したい気持ちになったことも多く、自分から船に乗ると言った手前、降りることができない葛藤もあった。そのような、極限の精神状態の日々を夫婦で過ごす中で、ある知り合いの方が掛けて下さった「周りの悪口が人を強くしてくれるよ」という言葉が今でも、強く印象に残っており、夫婦で大変勇気づけられたことを鮮明に覚えている。また、今になって思い返せば、私たちに手を差し伸べ、助けてくれた方たちの方が多く、その温かさには今でも感謝している。

② 夫からのフォローや夫婦での協力について

1人で漁船に乗って漁をするようになってから、3年間程度は無我夢中であつた。そして、少しずつ自分で舵を取って行う形での操業に慣れてくるに連れ、だんだんと海の怖さを実感するようになっていった。当時、操業していたサヨリ2艘引きでは、私は夫と別の漁船に乗り込み、操業をする必要があり、1人で漁船を操船することに強い恐怖を感じることも少なくなかつた。

しかし、当時、一番苦しんだのは、私よりもむしろ夫であつたようである。最近になって、当時の心境を話してくれるようになったが、1人で船を出して、ずぶ濡れで帰ってくる私を見ていて、安全に陸に帰って来てくれるか、とても心配していたそうである。

実際に夫はまだ操業に不慣れであつた私を助けながら、一緒に歩んでくれていた。日々操業を行う中で「最初は人の半分の量を獲れば良い」「風が吹いたら、他船が操業していても帰る

から」と言った言葉を常に私に掛けてくれていた。また、2隻で操業を行う際は夫と無線で情報をやりとりしながら操業するが、風の向きや海況情報などは夫が見て判断しており、そういった中でも私が安全に操業できているか、常に気遣ってくれていた。

③ 父や母からの指導や協力について

夫婦での漁業をやってくることができたのは、両親のさまざまな場面での助けもあったからだ実感している。

父については、尊敬する大きな存在であるのと同時に、私と夫にとっては師匠でもあった。私たちが跡を継いで漁業を続けていってくれることを大変喜び、健在であった頃から私たちのために残そうと計画的に新しい漁業機器の入れ替え等を進めてくれていたことは、今でもとても感謝している。

母については、今でも操業で家を空けることも多い私を支援してくれている。特に子供たちが幼かった頃は、家事や育児の面での支援がとてもありがたいものであった。

昨今、女性の社会進出がうたわれ、女性が多くのことを求められる風潮があるように感じているが、何事も過剰な無理は継続できないし、得意なことも個々に異なる。周囲の手を借りられる部分は意固地にならずお願いしてきたことで、結果として長く漁業を続けられているのだと思う。

(4) 女性が漁業に就業したことによる浜への影響について

女性が漁業に参加することは漁獲物の高品質化にも、メリットがあるのではないかとの声も聞かれる。

天羽地区の漁獲物は地元関係者の継続的な努力の甲斐もあり、江戸前の魚介類の産地としてのブランドを確立させてきた。

代表的な魚種として知られるタチウオは、千葉ブランド水産物に認定されている「竹岡つりタチウオ」に象徴されるように、良好な鮮度管理や丁寧な漁獲物の扱いが、豊洲や築地などの中央卸売市場の関係者や都内のトップランクの飲食店からの評価につながっている。これらの評価はもちろん、地元の漁業関係者全体の努力の結果と言えるが、漁獲物の丁寧な取り扱いや鮮度管理については、漁業の操業段階から多くの女性が参加していることも影響していると思われる。

刺し網でタチウオを漁獲するケースを例に挙げると、私たちは、高品質な漁獲物を提供するため、網に掛かる部分を歯の部分だけとなるように網の目合を小さく調整したり、産地市場で好まれる荷姿（タチウオを伸ばした状態）を保つように、いち早く大きいクーラーボックスやトロ箱に入れる方法を採用してきた。また、皆の手本となるように、魚を網から外す際にも、魚体の腹を傷つけないようにえらに手を入れることで、魚体に触れることのないように扱ったり、魚体が網に引っ掛かった際には、網の方を切り、潮が止まっている時間帯に操業することで船の揺れを抑えるなど、漁獲物のスレを減らすよう細やかな注意を払いながら、漁獲物の評価を上げるように努力を続けている。

女性漁業者の中には、こういった丁寧な処置や取り扱いを得意にしている者も多く、夫婦で協力して操業することが良い循環を生み、品質の高い漁獲物を生産し続けることに一役買っているのではないかとと思われる。

このような取組みの結果が高い評価につながっていると感じている。

なお、こうした手間を掛ける作業は1人で行うことは困難であり、夫婦で力を合わせることでやって来れたことである。

5. 波及効果

(1) 女性の漁業就業に対する周囲への影響

現在まで、夫と二人三脚で歩んできたが、漁業は「毎日、確実に答えが出て、毎日が勝負であった」と感じている。

当時は女性であるというだけで、漁師をやっていくことが大変な時代でもあり、私も夫も若くして漁業に就業したため、周囲からの雑音が聞かれたこともあったが、夫婦で継続して真摯に漁業に取り組む姿勢が周囲にも影響を与え、話しかけてくれる方たちも徐々に増えていき、私たち夫婦を浜の仲間として認めてくれる方が増えていった。

「漁師の娘」である私が夫や両親らの支援を得ながら、家業を継いだことが浜に影響を与え、「女性は漁船に乗せていけない」と言われた時代の空気が少しずつ変わって行ったように感じている。私たちがひとつの前例を作れたことで、「漁師の娘が後を継ぐこと」や「女性が漁業を行うこと」について、周囲からの理解を得ることのハードルがまだ十分とは言えないまでも、下がってきたようである。

今ではうちの漁協には夫婦船で操業する仲間が10組以上おり、中には私の学生時代の同級生も含まれている。現在、地元の浜では女性漁業者が網掛け作業をしている光景は珍しいものではなくなった。

(2) 女性が漁業に参加することによるビジネスモデルの変化

小型船漁業では、乗り子を雇用できるほどの収益がある経営体は多くないが、私たちの夫婦船の前例ができたことで地元では、夫婦で協力した操業を行うことで人件費の抑制や収益の向上につなげる新たな操業スタイルが広がっていった。浜の仲間たちからも、お互いに気心が知れたパートナーと操業を行うことで気遣いの負担も減り、操業の安全にも気を配りやすくなったとの声も聞かれており、今後の漁業経営のモデルのひとつになっていく気がしている。

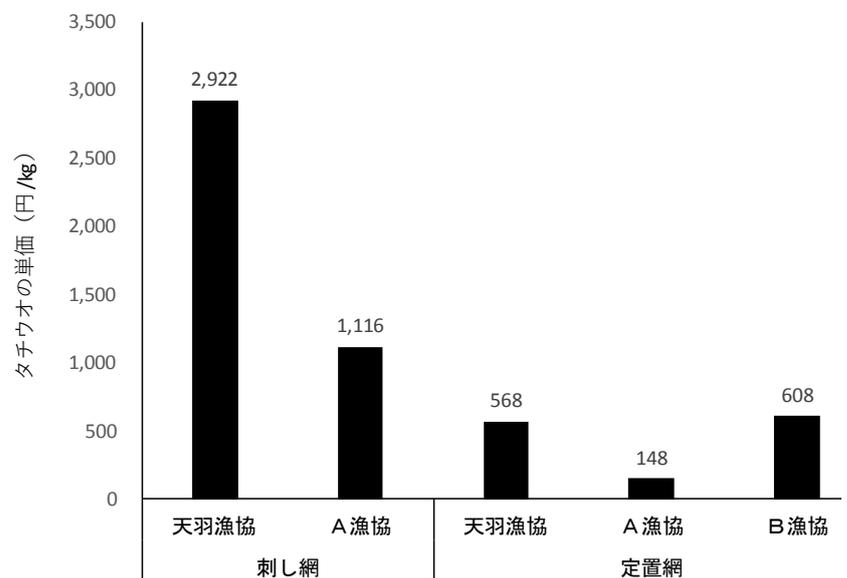


図7 天羽漁業協同組合のタチウオの漁法別平均単価

(2016～2018年の3年間の平均)。刺し網で漁獲されたタチウオの単価は県内の他漁協と比べても、高値で取引されている。

※B漁協の2016年のデータは1～7月分が欠損のため、8月～12月分で集計した。

また、女性が漁業に参加する夫婦船としての操業モデルは地域全体としての漁獲物の高品質化に、良い影響をもたらしてきた。私たちを含めた夫婦船が漁獲物の丁寧な処置や取り扱いを

行ってきたことで市場から高く評価され、それを見てきた他船にも同様の取組みが広がって行ったことが、地域全体としての漁獲物の高評価につながってきたと感じている（図7）。

6. 今後の課題や計画と問題点、展望

（1）今後の漁業への女性の参加について

現在、私たちが操業する東京湾は魚種が豊富であり、他地域の浜と比べれば、豊かな海であると思うが、今年いる魚種が来年も同じ場所にいるとは限らないのではないかと考えている。私と夫はよく今後の漁業をどのようにやっていくのか話し合うが、2人の認識はおおむね一致しており、現在の海況の変化や漁業の構造などについて、危機感を共有している。昔に比べて海の生産力は明らかに低下しており、これからは魚を多く獲る時代ではなく、資源管理や産卵期の親魚の保護を行いながら、高付加価値・高品質な漁獲物を生産し、単価を向上させることで収益を確保していく時代であると考えている。

そのため、私達も地元の漁獲物の品質の良さを消費者に伝えていくために、テレビ番組への出演やラジオでの情報配信等への協力も積極的に行うなど、地道な訴求活動を行っているが、こういった時代の変化に対応していくためには、今後ますます、女性の考えや感性を漁業の現場にも取り入れる必要があると思われる。

これまで実際に漁業に従事している地元の女性たちは、男性に比べて単純な力仕事などの面では不利な側面はあったが、近年は省力化機器の導入が進み、水揚げなどの作業を巻取機やクレーンで行うことも多いため、実際に男性と比べて大きなハンディキャップなどを感じる機会は大幅に減少している。

今後の漁業現場では、周囲との円滑なコミュニケーションや漁業関連機器の上手な活用によって女性の漁業就業へのハードルはより低くなっていくのではないかと考えている。

（2）今後の浜について

私達には、息子が1人、娘が1人いるが、現時点では、2人とも漁業に就業する様子はないようである。また、義娘（嫁）には負担も大きかった自分自身の道のを重ね合わせると、以前より女性が漁業に就業することに対するハードルは低くなったものの、同じことを求めるのは、厳しいのかもしれないと考えているのが正直なところである。ただし、私自身は後継者の育成は大変重要であると認識しており、漁業に就業して、技術を覚えたい人がいれば、男女を問わずに教えて行きたいと考えている。そういった中で、私が女性として、漁業の世界に飛び込んだ時に周囲から受けて助かった配慮や経験した苦労などを次世代の育成にも生かして行ければ良いと考えている。

今後、県や市などの行政機関とも連携して、次世代に引き継いでいける環境を目指し、今後も仲間と共に努力を惜しまず頑張っていきたい。